

文・写真 松澤美穂

地方 紀民 行鉄

眼光鋭い忍者電車が駆け抜ける。
 忍者の里は、
 駅にも城にも街中にも、
 至る所に忍者が潜む。

伊賀鉄道株式会社



遠

目にも目立つ大きな瞳がこちらを見据える。インパクト抜群の姿で伊賀上野駅に待っていたのは、くノ一の顔が正面に大きく描かれた伊賀鉄道の緑の忍者電車。

伊賀といえば忍者、忍者といえば伊賀。伊賀に来て忍者電車に出迎えてもらったら、向かう先にもやっぱり忍者にいて欲しい。伊賀上野駅から伊賀神戸駅まで、伊賀鉄道の車窓の景色を一通り眺めてから沿線散策を始めるつもりだったけれど、予定変更。何はともあれ、忍者に会えそうな伊賀流忍者博物館へ。

「どんでんがえし」に心残りが

伊賀流忍者博物館の最寄り駅、上野市駅にはホームの端や支柱の上、コインロッカーの上にも忍者が潜む。駅からすでに忍者尽くしで、いやが上にも気分は盛り上がる。

さて、目指す伊賀流忍者博物館は、築城の名手である戦国武将、藤堂高虎が改築した伊賀上野城を頂く上野公園の広い敷地の一角にある。セミの大合唱が降り注ぐ木々の間に建つ古い日本家屋がそれだ。受付にいたスタッフは、こちらの期待を裏切らない忍者装束。20人程度のグループごとに忍者屋敷を案内してもらった。

案内役も当然、忍者。ごく普通に見える日本家屋に隠されたさまざまな仕掛けを、実践を交えて説明してくれる。壁がぐるりと回転するおなじみの仕掛け、「どんでんがえし」を実践して見せながら、「やってみたい方は？」と笑顔で誘う。その視線の先には、こちららも

忍者装束に身を包んだちびっ子忍者たち。やってみたいとは思ったけれど、恥ずかしがって譲り合つちびっ子たちを差し置いて、「やりたいです!」とは言えずに我慢。

ああでも、やらせてもらえばよかった。

お城に忍者は良く似合う

忍者屋敷を堪能し、今度は上野城の天守閣へ。藤堂高虎が造った天守閣は台風で倒壊し、現在あるのは昭和10年に再建されたもの。それでも、周囲には高虎が築いた日本一の高さを誇る高石垣が残っているという。

天守閣の周辺にも、ちびっ子忍者が元気に走り回る。中には親子揃って忍者装束に身を包んだ外国人忍者の姿も見える。忍者出没は忍者屋敷の中だけかと思っていたのに、どうやら辺りを自由に闊歩しているらしい。黒い忍者装束が木々のすき間や天守閣の後ろにすっと消える瞬間は、楽しい笑い声さえ聞こえなければ、なかなかリアル。

天守閣の脇を通り、案内表示に従って高石垣のある方へ歩いて行くと、柵やロープに止められることなく、石垣の突端まで行ける。一番端の大きな石に足をかけ、慎重に覗き込んだすぐ先は、ストンと切り落としたような約30mの断崖。高所恐怖症というわけでもないのに、高さで足元の不安定さが相まって、首筋がすっとなる。見晴るかす景色はきれいだけれども、どこか落ち着かないので、早々に退散。

上野城の城下町、伊賀市の散策に繰り出す。



駅構内のあちらこちらに潜む忍者たち。地元の方は気にも留めずに電車へ急ぐ。

伊賀鉄道

【いがてつどう】

伊賀上野駅から伊賀神戸駅まで全14駅
 16.6kmを約35分で結ぶ。2007年近畿日本鉄道から運営を引き継ぎ現在に至る。





高石垣の下はお堀。周辺には注意を促す看板がそこかしこに。



忍者屋敷は平屋に見えて、実は3階建て。ちびっ子忍者が出没中。



ご縁があった緑のくノ一

忍者の里である伊賀市は、今年生誕370年を迎える松尾芭蕉の生誕地でもある。街灯にくつついた忍者に惹かれ、歩き始めた商店街を抜けた先に現れた上野天神宮は、芭蕉が句集「貝おほひ」を奉納した神宮だとか。城下町には、他にも生家や門弟の庵など、芭蕉縁の場所が点在している。

こちんまりとした城下町を歩いていくと、両側を目に映えるような白壁に挟まれた通りに入り込む。城下町を守るために置かれた七つの寺院がずらりと並ぶ「寺町通り」だ。人通りの絶えた道に、どこかから読経の声とお香の香りが流れてくる。

盆地である伊賀市は、三重県内で最も暑い場所の一つだと聞いていたので、かなりの暑さを覚悟してきたけれど、写真を撮るには少々残念な薄曇りの空模様がいささか、散策は案外快適。城下町らしい静かな風情を楽しみながら、調子に乗ってあちらこちらを歩き回っていると、曇りとはいえず、そこは夏、次第に暑さが堪えて疲れてくる。そろそろ電車に乗って、車窓の景色を楽しもう。

さっそく近くの茅町駅へ向かうと、ちょうど建物の間をすり抜けるように、緑のくノ一が瞳を光らせ走り去って行くところ。ひとまず近くのカフェで一休みして戻ってみると、やって来た電車は、またまた同じ緑のくノ一。忍者電車には他にも青とピンクのくノ一がいるはずだけれど、今日はどうやら、緑のくノ一にご縁があったらしい。

夏は無理せず、電車で行こう

伊賀鉄道は上野市駅から桑町駅までが居住地。桑町駅を過ぎると景色がガラッと変わって田園地帯になるといふ。車窓を見てみると、住宅が減ってきたと思ったら、さっと緑の稲穂が広がる。住宅をすり抜けていた電車が、林をすり抜け、田んぼを突っ切る。たった1駅、2駅で、確かにガラッと景色が変わる。

線路に沿って1駅間、どこかを歩いてみるつもりが、線路際まで稲穂の波が押し寄せて、線路沿いの歩道は途切れがち。もちろん、田んぼの向こうには道がある。少々線路を離れても迷うことはなさそうだけれど、車内の快適な冷房に途中下車をためらううちに、終点、伊賀神戸駅に到着してしまう。そのまま電車で折り返して帰るのでは不甲斐ない。気合を入れて、1駅前の比土駅に向け歩き始めてみたものの、何だかすぐに疲れてくる。

1駅歩くか駅に戻って電車に乗るか、悩む頭に思い浮かんだのは、どこかで聞いた、松尾芭蕉は忍者だったという都市伝説。曰く、芭蕉が『奥の細道』で、当時の彼の年齢では考えられない長距離を移動できたのは、特殊な訓練を受けた忍者だったからだとか。

真偽はともかく、健脚だったことは間違いない。伊賀神戸駅から比土駅まではほんの数km。芭蕉ならあつという間に歩き切る距離。現代人としても、本来なら悩むほどの距離ではないはずだけれど、現代の夏に無理は禁物と、足が勝手に踵を返す。

やっぱり電車でのんびり帰ろう。



田んぼを突っ切る緑の「忍者電車」。ミラーに映る眼光も鋭い。



かすかに読経の声が聞こえる、寺社の並ぶ「寺町通り」。